KSKR パンジーだより　No.94　第三種郵便物認可　通巻第 9156 号　2023 年 12 月 13 日発行

KSKR パンジーだより

一九九六年五月一日　第三種郵便物認可　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行

地域での生活支援の新たな始まり

１０月１３日、１４日、海外からのゲストを迎え、ピープルファースト大会ｉｎ大阪を開催。その翌日から、京都、横浜、そして東京と集会が続きました。全日程を終えた次の日、ＴさんからのＬＩＮＥ。香川県の入所施設から理不尽な理由で契約解除された９人の知的障害者たちが、「地域で楽しく暮らせるように支援をしよう」というメッセージでした。

私たちの創思苑は、クリエイティブハウス「パンジーＶ」を香川県で運営しており、９人の内の一人は、すでにパンジーＶを利用しています。他の８人がどうしているのか気になりながら、積極的な行動を起こすことはできていませんでした。そこに、ＴさんのＬＩＮＥが背中を押してくれました。

大阪では解決策が見つかるかもしれないけれど、始動してまだ４年のパンジーＶで何ができるのか…。多くの迷いを抱えながら、私たちは親に会うことから始めました。

私たちには、農作業の時の息抜きに使っていた休憩場所「ルシエル」があります。そこで「人手はありませんが、必要ならルシエルを日中活動の場に使ってください」と申し出ました。話は瞬く間に進んで、その入所施設の元職員たちが協力をしてくれることになりました。家族の休養を支えるショートステイや、当事者たちの外出支援も実現できるかもしれません。

まさに、ルシエルはこんな時のためにあったのでしょうか？

突如契約解除をされた知的障害者とその親。そして、その人たちを気にかけていた元職員たちや協力を申し出てくださった人達。ともに地域での一人ひとりのくらしを紡ぎだす活動が始まります。

私も、創思苑も一緒に歩みたいと思います。（林　淑美）

KSKR パンジーだより　No.94　第三種郵便物認可　通巻第 9156 号　2023 年 12 月 13 日発行

第28回 ピープルファースト大会 in 大阪

10 月 13 日と 14 日に、大阪で大会を開きました。参加者は 1272 名。これまでで最大の人数です。大会のテーマは「入所施設をなくす！」。そのために海外から当事者リーダーを招きました。今回は大阪の大会だけでなく、京都・横浜・東京でも海外ゲストの人たちと「脱施設」をテーマにした集会を開きました。どこの会場も満員で、入所施設に反対する仲間が増えたと感じています。

ロバートさんと一緒に、厚生労働省にも行き、施設をなくすように話をしましたが分かってくれていないと感じました。東京の集会では、国会議員の人たちを前に「早く施設をなくそう」とエミリーさんは怒っていました。私も同じ気持ちです。

私たちが反対運動をしないと入所施設はいつまでたっても無くならない。厚生労働省や社会の人たちが分かってくれるまで言い続けていきます。海外ゲストの人たちは、とても忙しいスケジュールでしたが、東京で別れたときには、入所施設をなくす行動が一緒にできたことを喜んでいました。これで終わりじゃない！世界から入所施設をなくすために、ますますつながりあっていきます。

大会実行委員長　山田 浩

世界から入所施設をなくすために、つながりあっていこう！

サー・ロバート・マーティン　Sir Robert Martin
＜ニュージーランド＞

「脱施設」は、私が長い間訴え続けてきたことであり、私の信念です。

私は施設で育ちました。そこで学んだのは、誰もこのような経験をしてはならないということです。施設で暮らすことで、人は傷付けられ、その痛みは一生続きます。施設は家族との絆を奪い、健康の権利や地域での生活権利、教育権利が侵害されます。施設で育った人々は人間関係のスキルも身につけられません。私自身も施設で傷つけられ、その影響は今も残っています。多くの友人や施設を出た仲間も同じ経験をしています。

ニュージーランドでは、私が育ったキンブリーという施設が2006年に閉鎖されました。政府が施設を閉じると言ってから12年後、ピープルファースト・ニュージーランドが政府に要望を出した後、閉鎖されました。ニュージーランドでは脱施設化はまだ進行中です。建物自体が施設を作り出すわけではありません。人がどのようにそこに入れられ、中で何が起こっているかが重要です。

大施設も、グループホームなど小さな施設も、障害者権利条約第19条には合致していません。どこに、誰と、どのように暮らすかを人々が選べるようにする必要があります。

私は、国連障害者権利委員会の役割を担っていることに誇りを持っています。日本をはじめほとんどの国で、施設主義がいまだに横行しています。障害者は自分の人生を自分でコントロールし、選ぶことができていません。2022年、国連障害者権利委員会は脱施設に関するガイドラインを作成しました。私たち委員会は、すべての国がこのガイドラインを使って施設をなくす行動を始めること、障害者権利条約第19条に書かれた権利を実際に行うことを望んでいます。

今こそ物事を良い方向に変える時です。施設がもたらす被害と、障害者の地域生活と自己決定の権利について声を上げましょう。Kia kaha　キア・ハラ！（強くあれ）

コリー・アール　Kory Earle
＜カナダ＞

カナダでは、かつて多くの大規模施設に、知的障害のある人々が生活していました。障害者が施設に入れられた理由には、障害を「悪いこと」と見なし、家族に施設入所を勧める医師の意見がありました。施設の環境は悪く、多くの人が虐待を受け、放置されました。

1974年、カナダでピープルファーストが始まりました。主な関心は施設の閉鎖でした。障害者である自分たちが地域でくらし、自分たちで選択でき、自分たちが人として完全な権利を持つことを望んでいたからです。施設の閉鎖を政府に要請し、1997年に地域インクルージョンの取り組みがはじまり、私たちはカナダの施設から人々を地域に退所させ始めました。

数年後、私たちは「脱施設に関する全国タスクフォース」を結成しました。タスクフォースは、カナダ全土の施設を監視するものです。施設の定義を作り、施設閉鎖と知的障害者が地域でくらせるように活動を行ってきました。この定義は以下のとおりで、世界中で使われています。

施設とは、知的障害者が隔離されたり、大勢集められて過ごしたりするところ全てを言う。
施設とは、自分で決められなかったり、決めることを許されないところ全てのことである。
施設であるかどうかは、その規模が大きいか小さいかによって決まるのではない。

2018年には、3つの大規模施設に約300人の知的障害者がくらすまでに減りました。新たな入所は受け入れていません。しかし他の種類の施設で生活させられている知的障害者は5万7千人を超えています。全ての人が施設ではなく地域でくらす権利を確かなものにするために、やるべきことは、まだまだあります。

エミリー・イェクストランド・ムティエン
＜スウェーデン＞　　Emily Ekstrand Muthén

私はスウェーデンで、グルンデン協会の副理事長兼政治関連の広報を担当しています。私は障害のある人とない人の違いのない世界を夢見ており、全ての人は自分の人生を自分で決める権利があると考えています。

過去のスウェーデンでは、障害者は入所施設に隠され、社会から忘れ去られていました。最悪の時代でした。1960年代から障害者の福祉について話されるようになり、住居と日中活動の権利が認められるようになりました。

1986年、新しい法律が制定されました。知的障害のある人が初めて市民として認められ、社会のあらゆるサービスを利用できるようになったのです。この法律の話し合いの場には、障害者が参加していました。そして市町村の責任で入所施設を閉鎖する計画を立てることを定めました。2000年1月1日、全ての入所施設が閉鎖され、解体されました。

私は現在、「Leva Livet,自分の人生を生きる」というプロジェクトを通じて、障害のある人々の人権と自己決定に焦点を当てて活動しています。世界のいろんな団体がともに協力することは、障害のある人が差別やあらゆる入所施設から解放されるために大切なことだと考えています。

私たち一人ひとりは小さなアリのような存在かもしれませんが、小さなアリでもたくさん集まればとても強くなります。集まれば集まるほど強くなれるのです。グルンデン協会の前理事長のトミー・アンデションがいつも言っていたことがあります。「人は心を使って考えるようにならなくてはならない。入所施設なんてぶっ潰してしまえ、愛でな！」。権利を守るための運動を決してやめないでください！

選挙の扉をひらき、社会の扉をひらく

大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所 客員研究員
菅谷 泰行

本年5月から、私は創思苑で知的障害のある当事者の人たちや職員の方々と「やさしく選挙を学ぶ集い」という選挙学習会の試みを続けています。創思苑の林理事長はこの『パンジーだより』の前号で「選挙の扉をひらく」という題目を冠して、私たちの選挙学習会を話題にされています。些(いささ)か面映ゆい、しかし、私たちの狙いの核心をつく指摘で、理事長の慧眼に敬服しています。私たちの学習会が選挙の扉をひらき得たかは別にして、遅々として進まない知的障害者の社会参加や政治参加の状況を打開したいという思いが強くあったことは確かです。敢えて言えば、「選挙の扉をひらき、社会の扉をひらく」、そのような願いがこの学習会を始めた動機だったと言ってよいでしょう。

選挙が近づくと、低迷する障害者の投票率が 俎上(そじょう) に載り、投票行動を支援する全国各地の取り組みがメディアによって紹介されます。そのような取り組みが有益であり、必要であることは論を 俟(ま) ちません。しかし、私たちは知的障害者の投票行動の推進や改善だけを目的としているわけではありません。投票は一つの結果に過ぎないのです。いま「選挙の扉をひらき、社会の扉をひらく」と書きましたが、私たちが目指しているのは知的障害者の「参加」です。閉じられた扉をひらき、知的障害者が社会に力強く進出し、他の障害者や障害のない人々と「共働」して、インクルーシブな世の中を創造していくこと、それが私たちのゴールであり、また学習会の方法論でもあります。

最後に、このように「参加」を力説する論調から、国などが標榜する「主権者教育」を思い浮かべる方がいると想像します。しかし、同床異夢の 譬(たと) えがありますように、国や行政のコンセプトが私たちの「集い」と同義であるかは吟味が必要だと考えています。むしろ、私たちは当事者運動の原点に立ち戻って、未開拓の新地平を切り拓きたいと念じています。「私たち抜きに私たちのことを決めるな」、この当事者の切実な訴えこそが「参加」と「共働」の源泉です。当事者と当事者の自立を支え続ける地域の福祉施設の声に耳を傾けながら、新しく始まった選挙学習会を成長させ、地域に根づかせるための努力を続けたいと思います。

※この選挙への取り組みは、パンジーメディア
第８７回「きぼうのつばさ」（11 月放送）で詳しくお伝えしています。
ぜひ、ご覧ください。

選挙に行こう！

知的障害がある人にとって、選挙には多くのハードルがあります。どうすれば投票することができるのでしょうか。パンジーで「どうして選挙が大切なのか」の勉強会が、5月から 7 回に渡って開かれました。講師は菅谷泰行さん。知的障害者が分かりやすく理解できる言葉や、伝え方の研究をしています。

8月には選挙管理委員会の協力を受け、市役所で模擬投票を行いました。そして 9 月。本番の選挙では、期日前投票所で東大阪市長と市議の投票をしました。

「投票所は暗いお化け屋敷のようで怖い」辰巳正一さんのそんな言葉から始まった勉強会。私たちの目標は、健常者（社会）と当事者の間にあるギャップを埋めることであり、試行錯誤の連続でした。また、これは当事者が学ぶだけでなく、私たち（社会）が気づくための取り組みでもありました。

私たちは、市（行政）に望むこと、困っていること、改善して欲しいことなど、当事者の「声」を東大阪市長と市議会派に送りました。返ってきた回答を皆で読んで、選挙で候補者を選ぶときの参考にしました。「声」の受け渡しは、当事者に政治との接点を実感させました。

全国で40万人以上いると言われている18歳以上の知的障害者が、さまざまなバリアーのために選挙から排除されているのが現実です。彼らが投票できない理由は、「選ぶ能力がない」からではありません。勉強会や模擬投票の場で、彼らが目を輝かせる姿をたびたび見ました。「声」はあるのです。しかし、政治的な選択肢として具現化するツールを、健常者である私たちの方が、この社会の側がきちんと用意していないことを考えさせられた数か月間でした。（會田　陽介）

いざ一票「自信になった」
知的障害者の挑戦
支援慣れていない投票所

取り組みが新聞に掲載されました

参加した当事者の感想

・初めてやったけど、勉強してやってみて、すごくよかった。これでうまいこと行ったら、障害者の事を分かってくれると思っている。（山田　浩）

・練習して、この人に入れたらいいというのが分かって、名前があったから名前を書いた。（中谷　利佳）

・投票できたよ。また次も来る！（仲野　宏祐）

・親と選挙に行きました。実際に支援投票カードを使って、受付の人に渡して、手が不自由だから手伝ってもらいました。自信がつきました。（井道　寛哉）

参加した職員の感想

・選挙の仕組みが難しいと感じていた当事者たちが、菅谷先生のユニークで分かりやすい説明に引き込まれていき、「早く選挙に行きたい」と前向きな声が飛び交うようになっていきました。「選挙は難しくない」と聞きつけて勉強会に参加するようになった当事者もいました。そして、選挙に参加した全員が、投票後には笑顔で「自分で選んで投票した」と自信を持っていました。私は、今回の勉強会で、挑戦する事が大事だということを教えられました。（田村　啓輔）

・私自身も選挙に行ったことがなかったので、こうして一緒に学べたことは良い経験になりました。パンジーⅡの石田さんや仲野さんが「受付に行くまでは職員に付き添ってほしい」と私に話していましたが、いざ受付に行ってからは良い表情になって投票を完了。その姿を見て、あらためて「これまで選挙に参加する機会を奪われていたんだな」と思い、今回のことが自信につながったのではないかと嬉しく思いました。（前岡　莉乃）

入所施設は人権侵害です

社会福祉法人ちいろば会
富田　忠一

9 月 28 日(木)ちいろば会で、利用者やそのご家族を対象にパンジーメディア制作の映画『大空へはばたこう～自立への挑戦～』の上映会を開催しました。

参加した利用者からは、「入所施設はぜったいいややや！」「わたしは、いまのグループホームがいいです」といった声があり、ご家族からは、「今までショートステイとして子どもを預けていましたが、入所させることは絶対にやめておこうと思います」という意見がありました。

ちいろば園をつくる前、1986 年に私は、大人の障害をもつ人たちがどんな暮らしをしているのかを知りたくて、静岡、長野、福島の入所施設で居候生活をした経験があります。

それぞれの施設に、1～3 ヶ月程度、施設内の職員寮に滞在させていただき、入所者のみなさんと一緒に日常の活動に参加させていただきました。いずれの施設でも、施設内での暮らしに色を添えようとあれこれ工夫が凝らされてはいるものの、施設側からの一方的なルールに縛られた、限られた場での限られた人間関係の中での暮らしであり、息の詰まるところが多いものでした。

その当時から 37 年が経過した今日も、この国には、入所施設で暮らす人が 12 万人余りも存在しています。なかには個室対応の施設やフランス料理の元シェフが作る食事を提供する施設などもあるようです。しかし、本人の明確な意思確認も抜きに障害を理由として、自身の望まない場所で長期に渡る暮らしを強要されることが人権侵害であるということに、私たちの社会はあまりにも無自覚ではないでしょうか。

今日、障害をもつ子どもたちが、特別支援学級や特別支援学校で学ぶことに違和感を持たない人たちが増えつつあるように思います。「ともに生きる」「だれひとり取り残さない社会」と謳いつつ、暮らしの場、学びの場、働く場をはじめ、「障害福祉サービス」という名目で、障害者(児)が普通の社会からどんどん切り離されている社会の現状を安易に受け入れていくことで、「障害者差別」がますます見えにくくなっているのではないかと感じています。

私たちは今、「入所施設は人権侵害です」と声高らかに異議を申し立てることが必要であることを確認できる内容の映画でした。

「この町で生きる」

千頭雄介さん、４３歳。東大阪市に生まれ、支援学校の高等部に入学するまで地域でくらしていました。その後、家庭や学校の中で他者に手が出てしまうなど落ち着いて過ごすことが難しくなり、１７歳の時に児童入所施設へ入所します。長い月日が過ぎ、千頭さんが３３歳の頃、一時施設を退所してグループホームに入居する機会がありました。しかし建物の２階から飛び降りるなど、ますます行動が激しくなっていきます。その後、精神病院を転々とする生活が続き、３６歳の時に砂川厚生福祉センターへ入所しました。

・・・それから６年半。

４３歳になった千頭さんは、今年９月、生まれ育った東大阪の町で、重度訪問介護を使い一人ぐらしを始めました。

今年の２月、『パンジーだよりNo. ９１』で千頭さんについて書いた時は、地域での生活に向けて日中への通所など体験をおこなっている段階でした。以降、創思苑が主要な受け入れ先となって、様々な事業所や行政機関とともに、千頭さんの自立生活を実現するプロジェクトを１年半かけて進めてきました。現在、体験時から関わっている支援者を中心に、千頭さんとの安心できる関係性を作っていくことを大切にしながら支援を行っています。

千頭さんが初めてパンジーに来た当初は、待つことが苦手で、飲食の要求が多く、落ち着いて過ごすのが難しいことがありました。しかし、千頭さんと支援者が一緒に経験を重ねてきた事で、今では見通しを持って待つことができるようになるなど、余裕を持って過ごせるようになってきたと感じています。

また、以前と比較して、飲食に意識が向いた要求のコミュニケーションだけでなく、支援者に対して“ここにいるよ”“これをやってるよ”と、自分のことを何か伝えようとする自発的な関わりが増えてきているように感じています。

一方、支援をする中で課題もあります。本人の家なので、好きな時に飲み物を飲んだり、家具や家電等も自由に使う事ができるように支援したいと考えています。しかし、本人の自由、要望があるからと、何杯もコーヒーを飲んでも良いとする人、適量を声掛けする人など、支援者によって対応が違うせいで、千頭さんの混乱を招いてしまうことがありました。

本人からの強い要求や、そのやりとりの中で行き詰まった時、支援者は慌てず、無理をせずに一旦“引いてみる”、そして“待つ”という対応の切り替えが大切だと考えています。また、同じ場所に留まって本人に長く説明をしたり、多くの言葉で説得しようと前のめりにならない事も大事だと思います。そうすることで、少しずつ、互いの歩調が合ってくるように感じています。

千頭さんは今、自分の家で大好きなお風呂にゆっくり入り、自分の服やタオルを丁寧に畳んだり、食事の際は食器の準備を支援者と一緒にしています。その姿は、自分の居場所を実感しているように見えます。その人に合った支援があれば、どんなに障害の重い人でも地域でくらしていけるという事を、少しでも多くの人に知ってもらいたいと思います。（北田徹）

書き損じハガキ、（未使用）切手を送ってください！

ご家庭や会社などで書き損じのハガキ、スタンプを押していない切手など眠っていませんか？
当事者活動部門ではこれらを集めて活動資金にあてています。ご協力お願いします。

匿名 2 名様　寺野享子様　　佐々木勉・君江様

パンジーでは、後援会員を募集しています。

賛助会員　１口　1ヵ月　　５００円　　本会員　　１口　1ヵ月　1,０００円
特別会員　１口　1ヵ月　3,０００円　　郵便振替番号 00950-1-300551　ｸﾘｴｲﾃｨﾌﾞﾊｳｽ「パンジー」

上映会を開きませんか？　DVD も好評発売中

知的障害を持つ人たちについて、もっと知ってもらうために、社会を変える力にしていくために
パンジーメディアは、出張上映会や自主上映会を応援しています。

『大空へはばたこう～自立への挑戦～』
『ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの』『みんなに伝えたいこと』など多数。

シンポジウムや人権の研修会、学校の授業、事業所の研修など、パンジーメディアの映画を通して、
語り合いや交流の輪が生まれ、知的障害がある人たちへの理解が広がっていくことと思います。

費用・内容は、パンジーメディア　072-968-1615 にお問い合わせください。
メールでもOKです！　pansymedia@pansy-net.or.jp　**（DVD も好評発売中）**

上映会・講演会の予定

- 11 月 16 日（木）　三宅町地域人権学習講座（奈良県）
  映画上映：「ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの」＆トーク
- 12 月 5 日（火）～7 日（木）　ころんつながり映画祭（和歌山県）
  映画上映：「ヒマラヤの青い空と白い雪がくれたもの」
- 1 月 11 日（木）　ほっこり枚方 2023～障害者の人権を考える（大阪府）
  知的障害者の地域生活支援を考える
  映画上映：「大空へはばたこう～自立への挑戦」
- 2 月 5 日（月）　箕面市「ふくしの航海日記」（大阪府）
  講演：知的障害をもつ人たちの情報発信基地「パンジーメディア」とは

編集人
クリエイティブハウス「パンジー」
東大阪市東鴻池町 2－4－8
TEL:072-963-8818
FAX:072-963-8825

発行人
関西障害者定期刊行物協会
大阪市天王寺区真田山町 2-2
東興ビル4階

一九九六年五月一日　第三種郵便物認可　毎月（一・二・三・四・五・六・七・八の日）発行　定価　１００円

かかわりの手がかりをさぐる

地域にくらす知的障害・自閉症の人たちのそばで

中新井澪子　著
社会福祉法人創思苑　パンジーメディア企画編集

さまざまな生きにくさの中で二次的に発生する、障害をもつ人たちの「問題となる行動」。
「専門性は日常の中で」のコトバを支えに、かかわりのあり方をさぐり続けた実践からこの本は生まれました。
そのエッセンスは、知的障害のある人にかかわる人たちにはもちろん、子どもとのかかわりに悩んでいる親や、保育所で働く人たちにも、大切な気づきをもたらしてくれます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

どんなに障害が重くても受け入れるという理念で始めたパンジー。その理念を実現するには、職員のかかわりが必要でした。中新井先生に来ていただいて、その教えを受けたことは、今もパンジーに受けつがれています。
ぜひ、お手に取っていただければと思います。

［定価］1,500 円（税別）

ご注文は、パンジーメディアまで
℡072－968－1615/Fax　072－968－7160
Mail　pansymedia@pansy-net.or.jp

お名前	
お届け先　〒	
お電話	ご注文冊数

ホームページ・Amazon からもご注文いただけます。

パンジーメディア　https://pansymedia.base.shop/➡